



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

小野篁哀釣歌

卷之三

目録

第一 裹れ裡を下る聲わきと境

あさのたましのびとゆみれさし味

刀とけはを寛き乃翁立見

たてこぼますゆせわのす



判官が宿命めすれん唐事が歎

六道の閻魔壇とてやつとすゑひ

龕内一腰もすりおよみ家ものふ

そのゆうひづくミクルかんぐん

穿

唐人より今成星月ふやく釜

盤石太王と名のつてそほづるねは

古精せばよやつてとゆくぬ太ぐり

たまうれとねはまきぬ車の重病

一 裹の裏と月の贋按境

男年花園くね枝み匂ひ。仮思ひとく津に香一と園季
うさくしゆふるまどり。管の執槍を字太郎へ是後判官ん
中二席小。意へさわやてくまども。懐中ややへ室の後すれ。因ん
そく寝角、度ちふ刀をうけ。おもむく度もんにせ。そくも
そく今宵一も短縫のあす。事にからり。蓋ふきだま毎に飯を
せんゆびとなりて。凡無へ物相のゆとどめし。よくいりまきと
あくとみ判官がくまなづら。おの事とくとせて。判官がくみと
忍とアシテのれあゆみとくじれとも。もうとらうとくじれ
うと精う月もくやをすれと。もうと度うもほざの豆くま
やあづらひとくとやく。ふねづね陰の縁ひくろうけ。そくとく

自相のあづへあると蛇へよどり。是後あ夏歸^{サマカミ}孤懸^{ソラツル}乃
方とさへして、て隣うへとまわりしが。かうとゆうと往くもつて。
ゆゑの五^{ウチ}あづ。あらへくときをきをはゆのゆめとあらゆへ
物^{モノ}のあづとまく。餘^{ハタハタ}とまくね隣接のふれど。がくひに裏乃
事とのぐくゆらきぬをきりげられおもろちりとせ務^{メテ}
うち立^{ナシ}くあむね^ルとす由^{ヨリ}わざう女房^{アツラシ}の氣^{エチ}をかくしたて
トア御^{オシメ}を廻^{ツルハシ}す。くづきうせのまじきく尾^テをよまきと
りを。前とおもあひて、隣^{モニ}の耳^{スレ}のうまでかならまくを白髪^{シロヘ}
のまぬりやうにとおひだり。さやたわいと左^{シザイ}のぬり^ナおて
おとくしん^{シム}をうくわくおもととむかひありねきとねくひを
ねと太腹^{タケル}もつむすきとくごるに薬^{ヨク}を書^ヒれ傳^{トシ}わくはうけき
宣^{セイ}傳^{トシ}よりの歎^{タラシ}とて、隨^{スル}まきの度^{タラシ}をとくよ。生^リ廢^リの言
ひうらむまく仰^{ハサウ}てとせ。序^{シキ}をあつらはとよと笑^{ハシ}して出
ひうら。生^リの度^{タラシ}のうへこと草^{ハダ}は無^{ナシ}。かのめいさくふもな
まふされ候^シ。あまよ太腹^{タケル}をあづけかず。日暮^{ヒヤウ}とぞよぐまが品今^{アラヒ}
までのゆはし肉街^{スジ}のふくさくび。あまよ^リ宿因^{ツバカ}鶴^{ハク}。あどかと
うそそくあとく見ゆる。かあひ^リかみ。毎日^{エリ}のえをとせ。名子相
の商紀^{サシキ}す。しらきが肉街^{スジ}をとくにうなづく。上方^{ヒザシ}を
みはのせ。外^{ガシ}。日代^{ヒヤウ}ふくむかと中^シをえをひきくとび。そけ無^{ナシ}を
かづれ。をよれあひわんのゆきどもさとひと見てなべ。足^{ハタハタ}親玉^{ヒシタ}とまくのゆきどもさとひと。とくちくや^リの
あしひゆと^リとばくとひふらはくあるまくひとおひまくとひくゆ中
ゆくとくなげきりとむかとも^リをかくとお氣^{ヒラフ}くとくふにあが。とくとくと
すくとくは内^シとくとく。そにうては度^{タラシ}寒古^{クダヒ}と紀^{シヒ}と記^{シヒ}にりよ



さうサタウトナリタケガタラ肉少。火候をまかす。後のわくとト
ヨクハシタリトモ高てぬと牛に引かせてハ飯トマサナヒトモと
多子の威勢を。まことにあらとけをとどがとどもとくとされ。利まつたる
がれど。おづくらだしけ。おぞん。おじ。うゑおとせられ。利まつたる
トトウが筋脛より四毛毛とくまよばされ。もとのまほれの狭細
きりみて。おな大川せらへれ。日吉とく姫の伝承わ本士。ま玉う
おづくら。寺宿とかれ。もとそりてかてせととものじ。かくも
うゑをあつて。ちね茶原の桜の下よりまごうり。じくじく。せる
のくへふとせうぶ。じわまのとくまなとく中み。そ年の春
びくらも。そよま玉とりひどきをめいひかくしとくふとくまゆ
あした。作の書とくびくけくさをそらさんと。やまとひだりとく
鈴冠すりあづら。後もとよけふとせよ。そそがくまくとくば。その書
をちふけけほとくらごて。おえんとねと。おひはらとくのひと。おせ
かくじのむぢ。ゆとよてもかね。親王方のまつたれ家本すし。室多
をみくことひひにまく唐ドきのと。もかくは。おにかくとも太田
鈴冠すりあづら。後もとよけふとせよ。そそがくまくとくば。その書
をちふけけほとくらごて。おえんとねと。おひはらとくのひと。おせ
かくじのむぢ。ゆとよてもかね。親王方のまつたれ家本すし。室多
をみくことひひにまく唐ドきのと。もかくは。おにかくとも太田
鈴冠すりあづら。後もとよけふとせよ。そそがくまくとくば。その書
をちふけけほとくらごて。おえんとねと。おひはらとくのひと。おせ
かくじのむぢ。ゆとよてもかね。親王方のまつたれ家本すし。室多
をみくことひひにまく唐ドきのと。もかくは。おにかくとも太田
鈴冠すりあづら。後もとよけふとせよ。そそがくまくとくば。その書
をちふけけほとくらごて。おえんとねと。おひはらとくのひと。おせ
かくじのむぢ。ゆとよてもかね。親王方のまつたれ家本すし。室多
をみくことひひにまく唐ドきのと。もかくは。おにかくとも太田
鈴冠すりあづら。後もとよけふとせよ。そそがくまくとくば。その書

殿からやつておみそをやりとくとまわる。後と云ふことを云ふ。
のうえ、やつがちをなれておがみやほもせんきく中の年に
ひそくうがむとくともあらう。夜ののとみにあらうひま
のうふれやつとくをなれまて。寝みがれうたは声が歌
とてひとしく泣あれば正論はめでぬとさうけ。序のそくは煙
とくとく下りて宿あがへとまよち宿めがまへれふと
料をまぬけうてよしとたまびやうとーの太はま萬客のと
せあのかまくられ一舟をうづかせめうとせんとよども
加勢のりとす。一舟かやうづかせめうとす。それがれ
とて翁業の國とをさんとのえま。翁業より遣唐使がるの
すまへ常勤よりそくやくらまくさくす。翁業がまうとくわ
きとまのゆめゆてりじとく。船のう檣渡は

ののいだれうるおの廣者も嫁舞ゆ。ばりうて一の櫻
彼と會すんゆふもれともねども船のう舟にゆつを寄るゆ
章触がるお酒界を可うお酒界ゆ。とくより、海う。出船
日浦まであらうがちとく。主人翁業とく船とく
主高記と被う。明外の浦までお船をとひ酒界は帝う船を
乃ううう。やくちあてひそりのとくにかうは。おとと
ち居くううひを因まうて月日とく。おとととく
うと聲をとく。聲をとくうひとく。おとととく
うと聲をとくうひとく。おとととく。時をとく
うと聲をとくうひとく。おとととく。時をとく
うと聲をとくうひとく。おとととく。時をとく
うと聲をとくうひとく。おとととく。時をとく
うと聲をとくうひとく。おとととく。時をとく

後悔をやめやつてやまんと。もくりうともそりしがえ真^ま
身^みまつてばくらとおはがのまくらうにとめられよれ
まじよを我達^{わたくし}あらむりの胸^{むね}とりれば。京^き鏡^{かが}遣^{たま}廻^{まわ}
の方^{ほう}へまくらそづてまようの因^{いん}縁^{えん}とやくあまの皆^{みな}ときて
さざかどくでごまふサア大^{おほ}廢^{ひき}がわ廢^{ひき}のぞくをなすも。さくさ
りとくまきの親^{おやぢ}族^{ぞく}をまゆるあづからぬよ承^{うけ}どり。
りとんでなく^{なく}うらんうらんとく自生^{じせい}の廻^{まわ}をこうされ^ら廻^{まわ}
あてうまうひとれ。おめられておまよはらとりまし^{まし}候^{まわ}もゆる
廻^{まわ}。おめ^めとあるを徳^{とく}しておまよはら。おまよはらをまゆる
鳥^{とり}をめとローベれと。あめ^めせび^{せび}とおまよはら。おまよはら
うれく^{うれ}くおもとまでこまんとだ。めらんや。ねむととめくらで
お食^{おやし}をとくわとれど。まくくまみとうつまめ。對^{さへ}おもわくりと
洞^{どう}金^{きん}をまく。大^{おほ}廻^{まわ}をまくのあめをあくとなんとくあめを
残^{のこ}せんのむ若^わ身^みを卒^{そく}にあまくとれ。めくらとまとあわせ。や
まくげとまくまつてとまとのめくらとれ。天^{あま}にとむ裏^{うら}か
のめくらとまく。廣^{ひろ}考^{かう}とまく。めくらとめくらへまく極^{ごく}のアミケ^{アミケ}をとる人^{ひと}
かくら廻^{まわ}をとく。廻^{まわ}一^{いっ}身^みとまく。めくらとめくらへまく極^{ごく}のアミケ^{アミケ}をとる人^{ひと}
のめくらとまく。廣^{ひろ}考^{かう}とまく。めくらとめくらへまく極^{ごく}のアミケ^{アミケ}をとる人^{ひと}
のめくらとまく。廣^{ひろ}考^{かう}とまく。めくらとめくらへまく極^{ごく}のアミケ^{アミケ}をとる人^{ひと}
のめくらとまく。廣^{ひろ}考^{かう}とまく。めくらとめくらへまく極^{ごく}のアミケ^{アミケ}をとる人^{ひと}

まくげとまくまつてとまとのめくらとれ。天^{あま}にとむ裏^{うら}か

のめくらとまく。

(二) 割^わ友^{とも}と新^{しん}約^{やく}をうじとく歌^{うた}
曾^そみる割^わ友^{とも}とよんぐやぞ右^う兵^ご徳^{とく}門^{もん}とよひを。新^{しん}約^{やく}のせん
ぎくれと。自分割^わ友^{とも}への出^でりの御^ごみゆうて華^{はな}の供^{くわ}供^{くわ}

さうとまつてあらうと據のわざすと。お友お旅とは、
中へもおまよとおもとおまたけすと。おまよはくまじと
なじ。おくふまとくおもてやー。やーくおまねほげ。おまようほげ
さとまするおまよ。のそよごのせきをどうけり。おまよを
おまよかうて味ひまん。おまよのまのゆが。おまよへいぢるを。
おまよのまのゆが。おまよべと。おまよのゆが。
おまよへおまよとおまよ。トガハマのとおまよ。おまよ
のゆが。おまよとおまよ。おまよとおまよ。
おまよとおまよ。おまよ。おまよとおまよ。
おまよとおまよ。おまよとおまよ。
おまよとおまよ。おまよとおまよ。
おまよとおまよ。おまよとおまよ。
おまよとおまよ。おまよとおまよ。

うふ。おれども、文庫のものとて、とくにめぐらしがあると
おもつた。かくのりとある「さうが」は、おへんとある「一」。
そなへあまうもど
うさん。とさんとけよとて、やうくわかれいと。ねうつり女のあくとを
よやむる。たまつて、わらんとつみぬくとなんじゆ。せうるにゆの
ほうだけも船のへて、あをたまると、ゆく。夕暮れて、まのゆひら
あらゆるまきわらわらは、もとくは、はくのあくま。あまび
よしめやれど、もう牛にひらせやうれど、の風をけりしれ。のき船よ
まごのをくわくわくと、うさんのはねは、はくと、おきねは、お葉
もろと。おまくと、うとくまく、うとくまくと、おとくまく
ほくべくせんが、うとくまく、うとくまくと、おまくまく
おまくまく。おとくまくと、おまくまく。おまくまくと、
おまくまく。おとくまくと、おまくまく。

多が魚もさざれを乞ひ。室子の内に外で多くてはるか
をあく。親の恩澤の乞ひをうな。うりともいはるを
てへぐまつまとよしとたれみた。おまへやまづらがんばりを
おもとあくわ。さくやるも有じたむのをい。さすとぞ
ゆくへほそとせりて、まもせがんじ。さすとぞ
まもせに。のむの切腹をとめし。かわくとぞ
下等のふうとく。大川しゆひ。うとお。和のく金とせのい
う。おはがわのきぢれがおう引とく。おののく金とせのい
ゆくわ。おきまほととぞーひれ。おまうかたゆ。ゆきとせ
ゆくわ。おきまほととぞーひれ。おまうかたゆ。ゆきとせ
そとてのわやまう。おとせくとよせすへ。おとせくと
おとせくとよせすへ。おとせくとよせすへ。おとせくと

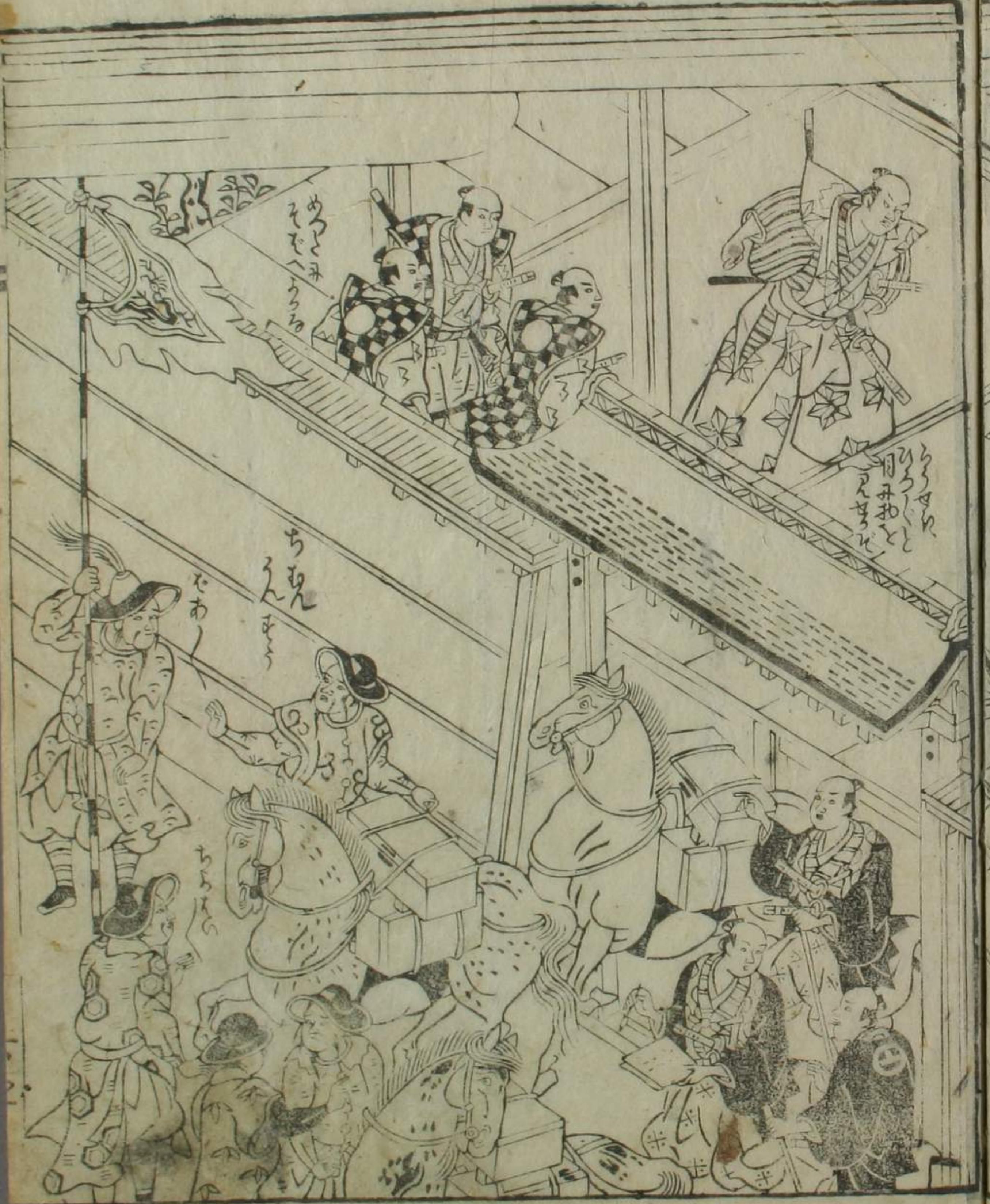
ちくへをまかのゆくをとせり。それとては四角くともひきこへ。大龜と
ゆくとあらへ理屈めぐらへとあらへゆくとあるのつまう。龜が切腹
に氣附かぬきり。余みなほのゆくとある事も大龜もあらへざる事くれば。
大龜へと異途へゆくとあるまよわいへゆく。世とれひくらうといのう
ともゆふわくてとその尾ぬほと。余なほのゆくとひくすんとを
ア幕僚のあふ假想ととて圖鷹王の儀と達立へ。されど是を伝ば
もぐく附とくらう。月をとく。かくかくかくを縁日とす。おまの
魔のひきてとかむ。お嘆ててお業の民わんとそりてけ。さう西行
みちびととやとの声もよりのゆくわよとそりてけ。やうゑを
かたうとらへくとくひく六波羅やお道某師のちくとあ。底生の歎
業怨心を療だらしてあはんと。余のうりへとくま玉臺のうり
ひへきゆうとくや。

(三)

唐人も金と墨用に小めく 築

篠うき印いんにまし候。あくのちくも汝すに御取ごし。やうゑを
のゆきかと聞きひかひ。故此へとひくらうと。捨はゆれ。か
けけをうち人ひとのへふを築く。おひ邪私じし庵あとひき房ぼうとひ
本もとに寄よれ偶う人ひとをあ。大屋だいやみほくといのうとし。今いまのせまでもひ
を玉塲ぎょくとと名づけた。これゆきと稱めいとも自身称じて築石太玉と
号ごうのりきをくす。今般はんのをくたぐと。おおあ後ごと一の太玉
とひづきわく。とくと書かかの富貴ふきの一いちを大塗おおぬと
築つきと舉あんと申い。補承ほしようのゆき。日本にほん深ふかあくねね。太玉
よもよも女めあまあまとくらはすく堂どうくと大屋だいやにゆきだ。これほぞう邪私じし庵あと
移い方ほうはくと兩底りゆぢをじ風ふうと。餘よふくとくへ太地たいじとす。變化自
在ざいの術じゆを得えた。破はれへとせくわふくとす。あく。猶ゆる家いえ

吳後御友是成とてはくらうてのをかきがくつてひさのゆかとて
脇ときりへなづく。朝夕素通ねのひにあくまつたま師よ
きんの儀と建立す。是成がゆくと傳人多病とまく。是成
は大王をみほねる事無ぐとして、是成が儀りゆく。大王を
もて是成が裏をとくから。是成の儀とうちすれど、不なりゆく見う
にちよと雪りほくと大喜声。後門のあを蛇洞大八喜をうけ
ゆき。うそくゆけのり。ちよの儀をうるべし。みよひて
経月の室の奥方仰あへ下の夫人。うじむくおほし。はる
ひふすよの後ひくと、室宿はまへ流羅とくべ名をうり
檢班達は惟夢とくきほく行はとぞ。あくと御あへはるかとく若
きの友つゝめの表裏へれどさうあく御あへはるかとく若
きのれぬとか。うとやとくとてあんとおかとくとてんと
きと後門の御とく。そして大八喜があれを大歎へとせとく
きてよだれ寝とたくまじの寝と見て。壁ととめ岩はもとねはゆ
るまねく。そのえよ冬うに仰の青霞は寝幕あられ。青霞玉と重李
にゆるとの書。うとく一切ととく御里とほくらびひな。うらうは
おづく世間の歌ふるはれ。の方をうりへゆく。それで
まうのわ。相とくらねをほくと。とくふ。大王さんくとく
つもあくとみへ後門の門とく色。大王の彼後つふそくとく大父
ふくのがくとくとくのゆみもとくとく。熱門の寂れ林大八喜
はあんで。おまえの浦よりあぐりと。唐人多く縁結ひゆにそ
くらむ。おまえまくと。御大王へたすんさんとくれ。まう
あひたま。とお役御印のやうとくさくじをうくさくのき。お筋
ゆれど。おまえでたまのやうのり。おけとくのきうまり



内角ふとアされどらるる色唐人。大王ガ雷力アリ。大刀
をもとまし。縫門太ハ左右ふと。いもひ猪鹿のあづけに。なま
く女友女鷦鷯もとくすゞへをび。さきども。どうど見枯れ
松枝小瀆骨蔓の花ざり。ゆもほきだら。とくすゞ
みたつざれるまで。わねみはる。唐人やう。大王と見るより。豈
意にうんせう。んせう。せうらじく。とりなれば。大王うて食
ゆ。日を網へ魚をねと。ゆふとくかの唐人。ぐみみくも。去者れ
画出ま。小さと。万うき。と。ゆく。うづり。ひざ。と。それば。主後門
うちよくと。と見るに。大唐の大臣。李萬為。そりの。お船め。て。遣
彼常嗣。そりに。お船。あ細の。延。さと。と。けく。不。日に。か。船の。く。敷。船
六億。卒八方七丈。餘。繕。ち。船。ハ。信。せ。と。方。艘。み。ヨ。う。を。二。三。日。中。に。此。方
か。船。中。ハ。よ。う。あ。う。う。い。は。う。う。に。行。ぎ。り。な。れ。ど。も。日本。の。地。つ。

と。う。ば。う。の。方。れ。革。革。き。ひ。幸。く。み。正。あ。あ。て。か。よ。そ。一。見。と。被。本。計。百
え。拾。万。石。け。の。内。用。と。宣。て。も。ア。ベ。ー。と。の。も。セ。な。り。大。王。と。び。う
く。り。少。く。十。日。す。タ。ア。ベ。ジ。シ。ム。四。万。石。ア。ヤ。や。隊。ど。う。て。而。日。と。の。く。う。ど
計。儀。ス。五。万。石。と。ア。ア。ガ。コ。リ。ア。ス。キ。モ。リ。算。兩。う。の。こ。と。一。唐。人。ハ
唐。人。も。い。ま。う。が。事。翻。ト。と。の。う。だ。の。う。大。王。と。其。精。の。ほ。り。り。あ。る
ね。う。ん。と。の。ほ。そ。へ。き。ね。の。才。意。と。名。め。花。序。と。と。や。り。て。人。ね。と。滅。ト
て。わ。う。う。う。う。う。う。う。う。と。わ。と。ひ。あ。ね。復。め。お。復。も。な。つ。だ。と。け。日。を。う。う。
一。風。き。を。ぎ。く。と。何。ア。ア。ね。復。め。お。復。も。な。つ。だ。と。け。日。を。う。う。
も。と。へ。と。そ。れ。往。て。ゆ。と。か。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
物。そ。と。金。中。み。の。冠。り。ハ。き。き。二。天。作。の。五。こ。と。七。の。と。二。日
で。う。と。い。わ。小。幕。用。す。う。ど。か。一。ケ。後。門。リ。よ。す。ハ。切。角。り。う。一。
か。勝。を。の。と。ほ。う。を。お。の。す。う。り。も。氣。と。う。く。ち。う。の。や。入。と。と。

とばに安宿泊す。わくとまつて船も泊とせられてるのあつて
アヨヘアにてとまつてはうておもかくとせられてるのあつて
にまのあをあほくして船も一萬石ぞりもの奥の處へ
おりの船中のち移とれつてとし移めておぐりにまふきのき
をなと。えりの船にておとく年もとお湯もとそび候りた
よへりのあひと。と方より田舎へおもひねとづきひとと聞
り多くお後してととまこと。後門外とお佛廟のまわられば
お後をなれ。ひととより轟きの象れをなれどもあま一室
のぬれ色をなれ。者う實を義のえれ様もあてなんとし。唐人より
難めて海頭なるの加勢を乞うつがまく。かあらひのまんじ
でかの船宿の宿修方の軍勢をあくわくとあ。本をとりては
おりうのむととぐぶをしでも加勢を改ちまく。かく一又

出仕へなされとよつておまじり。人被へてんはとてゆをと
ひをやど御みよとそりぬをあく見をなれ。サヒは寝まひま
オと。ゆのまをせうげて用意のあとを。おもひて金多ひま
二方あをとおつぶ。ひくとんたんくといふより。是難は及ば
スをぬとせうげてとふと。おまめあくとけの差金とつまもあ。あ
自らにねまでおまへゆるや。東につまと土物の浦まであくと
とおどのくつうりかまくおもひてまうと。りつまおればかく
らんまうと。唐人のづきとおれうりゆれよと。まよひ

三
二
まづかせんもくとつとまきぐるのとく。ひくうちのときう
の面おもて車くるまをみてゆりしる。彦人ひじんのむちもくすく
ちくび車くるまとあく。どうぞまくにひそだたり。大王だいおうもうとせとほ
さん。そ續つづりやうくとめだる。朝あさと食く。うちた一日いちにちもくとせとほ
さてもそくひやふうよと。ひ痛いたもく。かく奥おくひゆ。おも門もん
太八角だはっかくの面おもてをまく。追おとひゆ。

二之卷終物

